

要旨

16世紀半ばにポルトガル人が種子島に漂着すると、日本人は本土で西洋人と物質・文化の直接的交流を開始する。その後、江戸幕府統治下での禁教、海禁など、いわゆる鎖国政策が実施されていたにもかかわらず、海洋帝国オランダとの商貿活動は保持され続けた。そして、オランダを通じて西洋文化、主に実学の知識が徐々に輸入される。当初、これら輸入された物の流通はオランダ商館の所在地である長崎に限られていたが、次第に各地へと広がっていく。特に1774年、『解体新書』という解剖学の本が江戸で翻訳・刊行されると、蘭学という洋学運動が瞬く間に展開されていく。

1811年以降、江戸幕府は蘭書の翻訳機関として「和蘭書籍（蛮・蕃書とも）和解御用」を設置し、百科全書の『厚生新編』を翻訳することを命じる。幕府の指示の下、十数人の優れた蘭学者が三十余年にわたる努力の末に百巻ほどの訳稿を完成させた。これにより、蘭学は民間にとどまらず、公学としても認められた。

こうした背景を有する蘭学に関して、今日の学术界では、江戸幕府の翻訳事業としての『厚生新編』及び蘭学に関する研究は少なくない。江戸時代における学術の活発さ、ないし明治以降の近代化に大きな役割を果たした、と評しながらも、その封建権力を補強したことのような局限性も指定される。

今日の訳書と同様に『厚生新編』などの蘭学作品には、翻訳だけでなく、注釈としての「按」が確認できる。ただし、「按」には簡便な解説だけでなく、詳細な考察が含まれる。興味深い点は、大量の漢学資料が確認できることである。訳書は漢学知識や漢文、漢語など普遍的な存在であると言えよう。

近代的な解釈学の視点からみれば、翻訳活動と知識の生成・更新とは新旧の交渉・融合の過程であり、いわゆる「地平融合」（英語 *fusion of horizons*、ドイツ語 *Horizontverschmelzung*）に到達したものと思われる。周知のように、江戸時代において、儒学、特に朱子学は幕府によって国家支配のための思想として採用され、公的な学問に定められる。漢学・漢文は知識人の基本的な素養であったため、漢学資源の存在は自然なことであった。

従来の多くの研究は、イエズス会員などの漢訳洋書の影響を論じる。また一部の学者は、漢学を蘭学発達の基盤及び契機とみなし、蘭学者の博学を称賛する。だが、多くの研究者は西洋文化（近代）への転向、あるいは漢学（伝統）からの離脱を強調しているように思われる。蘭学資料に初めて触れた際、筆者も蘭学を近代文明の萌芽として取り扱った。しかし、蘭学作品、それらの漢学資源ははたして「どのような役割を果たしたか」、「どのような限界があったか」など基本的な質問には答えられない。

これまでの段階は、西洋知識の受容という立場から探索を進めることが蘭学研究の主流であり、漢学の問題を深く探求していない。個別の存在は学問と学問との中間領域（Margin area）に過ぎないかもしれないが、大量の漢学知識及び漢文（語）は蘭学の必要不可欠の一部分であるべきと考えられる。

漢学と蘭学との出会いは、両者をそれぞれ数字の1と仮定しても、四則演算が成り立ち、三種類の異なる結果に至る可能性がある。況して異質な文化の間で、 $2\text{H}_2+\text{O}_2=2\text{H}_2\text{O}$ のような化学反応式が示すように、特定の比例、特例の条件の下で、別の新しいものとなる可能性も高い。従って、両者の関係を徹底的に考える必要がある。

前述の「地平融合」という理論を問わなくとも、蘭書翻訳、知識の転化・生成など、具体的な蘭学の実態を究明するには、漢学の存在は無視できない。よって、本論文では蘭書翻訳における漢学の役割とその限界について検討したい。

しかし、蘭学資料は膨大であり、全てあたることは不可能である。筆者は『厚生新編』を中心に論を進めていく。同書を取り上げる理由は、公的な仕事として翻訳事業がおこなわれただけでなく、百科全書として豊富な内容を有し、前後の歴史関連などの要素を考慮するからである。

以下、全体の構成について述べる。

序章（『厚生新編』：江戸幕府の蘭書翻訳事業）は、従来の『厚生新編』に関する先行研究を整理し、成果や問題点を指摘する。そして今後の目的、研究方法、論文の構成を簡単に紹介する。

前編、第1章から第4章では「東西側における知識の衝突と融合」をテーマとして、訳稿に反映された知的な東西文化の交流を考察する。漢学知識が参考とした理由及びその範囲を整理した上で（第1章「厚生」を目指した翻訳事業）、文献の類別ごとに、それぞれに「本草書の参考と批判」（第2章）、「その他の科学技術文献及び一般漢籍の参考」（第3章）、「漢訳仏典と漢訳洋書との

参考」(第4章)について論じる。ここでは、翻訳者の重視した実証・実用性という特徴を明らかにする。これら漢学知識の参考及びその批判は両方面に集中していると考えられる。

後編「新概念の輸入と創出」は、第5章から第10章でなる。ここでは言語、特に訳語研究という分野を検討したい。第5章(「翻訳文体と訳語」)は『厚生新編』をはじめとする蘭学作品の文体を試論し、漢文が書面の「共通語」(リンガフランカ)・二言語使い分け(ダイグロシア)における高位言語としての地位、さらに漢文訓読体が遍く利用されたことを明らかにする。一方、和漢混淆文(漢字平仮名交じり)の検討、認可及び実際の矛盾の考察を通じて膨大な漢語の存在が明らかとした。第6章(訳語創出の方法:「直訳」「意識」「音訳」について)は蘭学文献にみる訳語法の源流・変遷を遡り、理論的に訳語創出の方法を探る。ここでは関連資料に基づき、蘭学者が儒家経典、漢訳仏典及び日本人学者の翻訳理論や実践とのつながりを遡ることで、訳語法の次第・限界・転化を把握する。以下の三章では、具体的訳例を挙げ、音訳(第7章 音訳語及びその漢字選択)、義訳「汲義」(第8章 七曜日における伝統から近代への軌跡)、直訳「摹借」(即ち「翻訳借用」、第9章 「解剖学」という概念の確立及びその日中交流)など、三種類の方法の応用について考察を試みる。語彙・概念の視点から、伝統から近代への転化過程において、漢語資源の役割・限界、または蘭学者の取舍選択を明らかにしていく。訳語に関する議論では、「羅甸語」、つまりラテン語にしばしば言及されている。そこで蘭学者のラテン語学習、特にその認識やルートなどを解明する(第10章 訳語創出におけるラテン語学習)。

最後に、結論として「参考と批判:蘭学翻訳の視点から見た漢学」を終章とする。終章では、各章の内容をまとめた上で、蘭書翻訳の特徴として「訳者は透明ではないこと」を明らかにした。また、『厚生新編』を代表とする蘭学者が如何に漢学資源を利用し、翻訳史論を構築していたのか。さらに伝統的文化資源を継承・突破する、ということを検討した。

以上、各章で示したように、本論文は『厚生新編』ないし蘭学の全貌や論述の均質さよりも、従来の蘭学研究で軽視された漢学についての問題を提示したい。論述の際、翻訳の立場で、漢学知識の存在の原因、範囲、参考・批判、文体の諸問題、訳語の方法・使用及び重要概念の訳出・変遷・流布・固着など、具体的な知識・言語の問題を究明することを目指す。

ただし、注意すべき点として、本研究の目的は漢学の役割や影響を論証するのではなく、蘭学の構造、知識の生成・転化の考察を試みていることである。この過程により蘭学者の議論から、蘭学と漢学の比較対照を試みる。当然、対比は目的ではなく、手段である。漢学を代表とする伝統文化と蘭学ないし洋学、即ち近代文化との関係を検討する。より詳細に言えば、両者の連続と断裂を考察する。

本論文は、主に蘭学と漢学との交錯を通じ、蘭学以降の学問の動態を明らかにすることを目的とする。また、蘭学者の目を借りることで、漢学などの伝統資源の不足や限界を明確にしたい。

実際、『厚生新編』及びその他の蘭学文献には、『日本書紀』『本草綱目啓蒙』などの日本の典籍がしばしば登場している。議論の中で、ときおり言及されるが、深く追究されることはない。漢学と同様に、今後のより詳細で、奥深く、全面的な研究を俟つ。さらに、中日欧の文化交流という視角から、三方面の関係及び前近代・近代における日本ないし東アジアの歴史的変遷の再考察が必要であると思われる。